シゲクナリヌ、目六ヤアリヌベキトテ、御簾ノ内ヨリ硯紙ヲトリ出テ給タリケレバ、紙ヲシヲリテ、スコシモウチアンゼズ、カヽレケルガ、アマリニタヤスカリケルヲ御覽ジテ、召テコレヲミ給ケルニ、カキサママコトニメデタカリケレバ、シキリニ御感アリテ返シ給ツ、光頼座ヲ立テ後、仰ラレケルハ、アハレ職事ヤ、又ヨニカヽルモノイデキナムヤ、ユヽシキ君ノ御タカラカナト仰ラレテ、タヾシ一ノ人ナドノ御前ニテ、御硯給テツカウヤウヤウゾ、イマダナラハザリケルト仰ラレケリ、ソレホドノ□キコト也、

〔羅山林先生行狀〕惺窩○藤原謂人曰、林忠○羅山聰達、稟性最敏、朝不待晝、夕不待夜、夜課不延于明旦、當世豈無捷悟强記之輩乎、然不如彼之黽勉奮進、今之見韻書者、雖辯平聲而仄韻不分別、彼能使上去入聲之不混合、實是細事也、然其記識之精、可類推焉、

〔嚴有院殿御實紀附錄上〕明暦二年十二月、御灸をなされし時、老臣等を御前にめし、種々の饗賜はり、いづれもさるべき物語して、御聽に備へよとありしに、たれも頭かたげて有し時に仰らるゝは、神祖の御代このかた、諸家に用ひし所の旗馬印さま〳〵なりと聞しめしぬ、其品いかゞなりや、豐後には常に好で舊記をよむよしなれば、定ておぼえつらん、わづかなりとも聞え上よとのたまへば、豐後守かしこまりて、多くも心得侍らねども、思ひ出し分を聞え上むとて、つぎ〳〵に誰はかく、某はいかになど聞え上しに、遂に數十家に及びければ、公○德川家綱をはじめ奉り、近臣等みなその强記に感じける、傳役安藤備後守資俊、硯もちいでゝ、一々に書記しける、物語はつる頃、御灸事も終らせられしと也、

〔先哲叢談續編二〕三宅道乙

一日、仙洞御所有和漢聯句百韻之擧、當時稱鴻宗碩匠者、悉陪其筵、後其詞藻、傳於寰闤、道乙嘗一見之、不復展卷、最後連歌名士、里村道作、會飲時流於家、道乙固雖不從事其技、與之友善、往在其席、坐客